

山科盆地の大集落

—中臣遺跡—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



山科盆地の地形と主要遺跡の分布

中臣遺跡の所在する山科盆地は東側を音羽・醍醐山地に、北側を比叡山地南部にあたる如意ヶ嶽をはじめとする山塊に、西側を東山・桃山丘陵によって画され、南側だけが開いた形となっている。この小盆地の中央部を山科川が南流し、盆地西寄りには旧安祥寺川の流れがある。やがて盆地南端部付近でこの両河川は合流し、更に南の六地藏付近で宇治川に注ぎこむ。

中臣遺跡は、山科川と旧安祥寺川の合流点の北側に広がる台地上(下位洪積段丘)に位置する。これまで70次を数える発掘調査や下水道工事などにもなって実施した

立会調査などの成果から、遺跡の範囲はほぼ画定されている。それによると、合流点から北へ約1.1km、東西約0.8kmの範囲にわたって広がり、面積約60haを有する大規模な遺跡である。

中臣遺跡が位置する台地およびその周辺は、古くから栗栖野くるすのと呼ばれ、この栗栖野の地は平安時代には天皇や貴族がしばしば遊猟し、また歌詠みの名所として知られていた。ところで、山科の地が歴史上にスポットを浴びることになるのはこれより古く、天智天皇が近江・大津の地に宮を構える頃のことである。天智天皇8年(669)5

月に、大海人皇子や内大臣中臣鎌足以下の臣下を連れて、「山科野」に狩猟したという記事が『日本書紀』にあり、文献上にはじめて山科の地名が見える。近江から大和へ通じる道筋(古北陸道)にあたる山科はまた、『扶桑略記』に山階やましな陶原家すえはらのやとするされた鎌足の居宅がこの地にあったとみられるなど、中臣氏一族とゆかりの深いところである。話しは前後するが、中臣遺跡は1969年に西野山中臣町で、地元の高校生によって発見された弥生土器により、その存在が明らかになった。発見された地名にちなんで、中臣遺跡と命名された。この中臣町という地名の由来は定かでないが、中臣氏あるいは中臣部の人々と因縁浅からぬことごとしとして伝承され、いまに残ったのであろうか。

さて、本題にもどろう。この中臣遺跡から出土したもっとも古い年代の遺物には、今からおよそ一万年前の有舌(茎)尖頭器と呼ばれる石製の槍先がある。ただ残念ながら、この時期の人々の生活の痕跡は、現在までのところ見つかっていない。次に人々の活動した痕跡がわかるのは、縄文時代中期の終わり頃からのちである。竪穴住居などの住居跡はこれまで発見されていないが、ごみ捨て穴とみられる土壇や、煮たきに使って

年代	時代	遺跡の内容
10,000	先土器 (旧石器) 時代	有舌尖頭器
	縄文時代	甕棺墓 石器
300 B.C.		
0 A.D.	弥生時代	方形周溝墓 土壇墓 竪穴住居
300		
	古墳時代	中臣十三塚 作り付けカマド
645	飛鳥時代	条里制
710	奈良時代	掘立柱建物
794	平安時代	井戸

年表



発見された焼失住居（黒く見えるのは焼けた建材）

いた甕を転用して棺にした甕棺墓などの墓跡を数箇所で見ている。遺物では、この頃の土器や石鏃・石斧・石皿・磨石・石錘などの石器が多く出土している。この頃までの人々は狩猟・漁撈や木の実などの採集という、自然の幸に大きく依存した生活を送っていた。

こういう時代の終り頃、九州地方の北部を中心とした地域に大陸から稲作が伝来した。やがて、近畿地方にも伝えられ、その頃よりあまり時日を経ることなく、中臣遺跡の人々へも稲作が伝えられた。この時代を弥生時代という。

中臣遺跡ではこれまでのところ、弥生時代の中頃までの竪穴住居跡を発見していないが、溝で墓域を方形に区画した方形周溝墓や単に地面を掘り窪めただけの土壇墓などの墓跡を発見している。弥生時代の終り頃から前方後円墳などの古墳が作られる古墳時代の初め頃にかけて、竪穴住居・方形周溝墓などを多数発見しており、集落の隆盛を迎える。発見した竪穴住居

の平面形を見ると、方形・円形・多角形とあり、方形の竪穴住居がもっとも多い。なお、多角形は五角形と六角形を発見している。次に、大きさについてみると5m未満、5～7m、7m以上の大中小があり、概して方形竪穴住居は中小に、円形・多角形竪穴住居は大中に属している。

竪穴住居から出土した土器についてみると、地元で作られた土器に混じって、当時の中心地であった河内地方で作られた壺などの土器が出土している。また地元で作られた土器にも、形や文様などに先述の河内や近江・東海地方などの強い影響を受けたものが見られる。このような文化の伝播現象は、古代を通じて全般に認められる。中臣遺跡が古代の重要な道筋に位置していることと無縁ではなからう。

さて、古墳時代の中頃は人々の活動した痕跡があまり明確ではない。しかし、古墳時代の終り頃から、ふたたび隆盛期を迎えることにな

る。集落に関する遺構には、竪穴住居、掘立柱建物、用・排水路を兼ねた区画溝などが多く発見されている。この時代の竪穴住居は平面形が全て方形で、壁際の一箇所にはほぼ例外なく、粘土などで築いた作り付けのカマドがある。掘立柱建物は、その主軸方向が7世紀後半頃のある時点に境に変わる。それまでまちまちであったものが、ある時以降、方位にのっとった配置を採るようになる。この背景には、条里制の施行が介在しているとみられる。また墓として中臣十三塚と呼ばれる古墳群が、遺跡の北西地帯を中心に築かれる。

中臣遺跡の移り変わりを大雑把にみてきた。遺跡の所在する台地は、現在、宅地造成が急速に進行しており、つい20年程前までみることができた、弥生時代から連続と続いた農村風景は、今や見る影もない。しかし、景観をかえながらも今も地下には当時の人々の活動した痕跡がしるされているのである。